

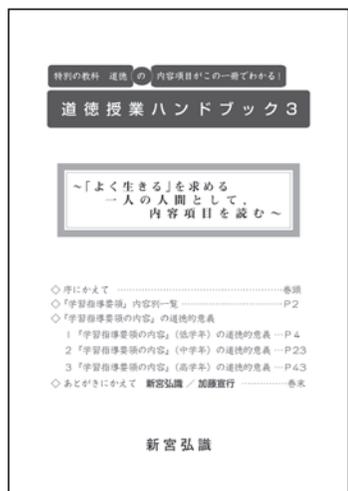
●マイハート		
◇心をひとつにして がんばってるモン!	くまモン……	2
●特集/「特別の教科 道徳」の評価を考える		
◇～その捉えからの期待	石隈利紀/加藤宣行……	3
●特集/終末・発展—教科化の趣旨から考える		
◇道徳の教科化の趣旨を生かした		
導入・展開・終末・発展の類に関する研究	新宮弘識……	7
◇道徳的価値をまとめ、発展につなぐ、終末の工夫と発展の在り方	星崎啓介……	11
◇今後の発展につなぐ終末の工夫	関 弘子……	13
●リレー連載/デジタル道徳を活用した授業		
◇児童の心にしみた、國中教授からのメッセージ	風間嘉裕……	15
●連載/心に残る道徳授業		
◇子どもの柔軟な発想に脱帽!	加藤宣行……	17

本文中の勤務校は平成28年8月現在のものです。

新発売!

道徳授業ハンドブック3

～「よく生きる」を求める一人の人間として、内容項目を読む～



子どもと教師が作り上げる道徳授業の
神髄を余すところなく示した必携の一冊!

■新宮弘識 著

■定価 515円 (477円+税)

■A5判/64ページ

※市販はしておりません。購入については
下記にお問い合わせください。

03-3262-3270 光文書院 営業グループ

※『道徳授業ハンドブック2～子どもの目が輝く道徳の授業をどのように
つくるか～』も好評発売中!

■「子どもの道徳」へのご意見・ご感想をぜひお寄せください。

弊社 web ページ「お問い合わせ」コーナー <http://www.kobun.co.jp/contact/>



心をひとつにして がんばってるモン!

熊本県営業部長兼しあわせ部長 くまモン



今回は、「熊本県応援号」として、熊本県の営業部長くまモンにご登場いただきました!

—熊本県の営業部長兼しあわせ部長という立場ですが、どのような仕事をされているのですか。

くまモン 熊本の人には熊本の魅力をもっと見つめなおしてもらい、県外の人には熊本のうまかモンやよかところを知ってもらうために、隊員(くまモン隊:くまモンとともに「くまもとサプライズ」を広げる活動をしている・編集部註)のお姉さんやお兄さんと一緒に、色んなところに出動してるモン!

—仕事をされている中で、気をつけていることはありますか。

くまモン みなさんに笑顔になってもらえるように、いっしょうけんめいがんばっているモン☆
—くまモンが営業部長兼しあわせ部長として仕事をされるようになって、熊本にどのような影響がありましたか。

くまモン 日本全国や海外からもあそびに来てくまざる方がいらっしゃるモン。ボクのお仕事で熊本を知って、そして好きになってもらえて、とってもうれしかモン☆

—海外出張もされていますよね。どちらに行かれましたか。印象に残っていることはありますか。

くまモン ヨーロッパ、アジア、アメリカ、色んなところにおじゃまさせてもらってるモン。どの国や地域のみなさんもやさしく迎えてくまざるモン☆
—これまでの仕事で、楽しかったことやつらかったことがあれば教えてください。

くまモン たくさんの笑顔に会えるから、どのお仕事もとっても楽しいモン☆

—平成26・27年には、くまモンが先生となった教育活動も行っていますね。先生になった気分はいかがでしたか。

くまモン お友だちといっしょに勉強できてとってもうれしかモン☆ お友だちが住んでいる地域のことなどを、楽しく真剣に勉強しているモン!

—熊本地震の後、しばらく活動をお休みしていましたね。どんなことを思っていたのでしょうか。

くまモン 日本全国や世界中のみなさんが、熊本のことを心配、おうえんしてくれて、本当にうれしかったモン!

—熊本地震後、約3か月が経ちました。現在、地域の人々はどのような状況でしょうか。

くまモン もっともっと元気な熊本になれるように、心をひとつにしてがんばってるモン!

—復興に向けて、今後どのようなことが必要でしょうか。私たちにできることを教えてください。

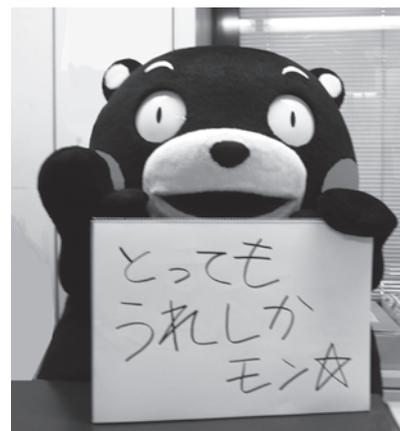
くまモン ぜひ熊本にあそびに来て、熊本のよかところやおいしい食べ物を楽しんでほしかモン☆
—熊本には、熊本城をはじめすばらしいところがいっぱいありますね。熊本の魅力を教えてください。お気に入りの場所や食べ物はありますか。

くまモン いっぱいあってひとつに決められないかモン! 世界文化遺産の『万田坑』(荒尾市・編集部註・以下同)や『三角西港』(宇城市)、国宝の『青井阿蘇神社』(人吉市)など、魅力がいっぱいだモン。食べ物もおいしいのでぜひあそびに来てほしいモン! 【熊本県観光サイト なごみ紀行】
—熊本に行ったら、くまモンに会えますか。

くまモン 『くまモンスクエア』でボクに会えるかモン☆ ボクのスケジュールはこちらをチェックま〜☆ 【くまモンスクエア】
—最後に、これからどんなことがしたいか、くまモンの夢を教えてください。

くまモン これからも色んなところにおじゃまして、元気な熊本のことを伝えたり、たくさんの方とふれあったりして、みなさんに笑顔になってもらいたいモン! これからも、おうえんよろしくま☆

3月12日 熊本県生まれ。やんちゃで好奇心いっぱいの男子。いちおう公務員。得意技は、くまモン体操と、サプライズ&ハッピーを見つけて全国の人に知ってもらうこと。



「特別の教科 道徳」の評価を考える

～その捉えからの期待～

東京成徳大学教授 石隈利紀
筑波大学附属小学校 加藤宣行

加藤：道徳の評価は非常に注目されています。私は1時間での見取りと複数時間の中で意識の変化を見取ることを考えています。子どもの実生活へ踏み込み、道徳の授業をきっかけとした言動の変容まで見取っていくか。「行動の記録」は「行動評価」になります。「行動の記録」は「何をしたか」「何ができたか」という面から○を付ける評価。道徳で評価するのは「態度評価」。「態度評価」とは「何をしたか」「何ができたか」ではなく、そういうことを「しようとしたか」「するためにどのような努力をしたか」が反映されます。道徳は様々な価値があり一つにくくれない。命を救うため約束を破る場合もあり、生命尊重と規則の尊重が拮抗・対立する。双方の立場から考えてみる。「この人のためになんとか役に立ちたい」など、もっと心の根源の部分を構造的に捉える。同じ行為・行動でも、こういう考えでもできるし、そういう考えでもできるよねと。教科書をそのまま受け入れ、子ども自身がよい意味での批判的な思考をしないと、命じられ従うだけの子どもに育ってしまいます。「こういう気づきがあった」という観点の評価ができる。内容項目の一つひとつだけの捉えではなく、道徳的価値を全部身に付けたらよい人間になるのかという話でもなく、それらの価値のすべてをもとに自分はどう寄り添うか、誠実であるべきかと考えていく。「主体的」とありますが、他律的な道徳観ではなく「こういう生き方をしたい」「やってみたい・試してみたい」という主体的な心の動きに発展させる。そういう観点で意欲をもって生活に生かそうとする。授業の中でどこか本質に気づくようなところがあれば、「この子はこういう気づきがあった」などと記入しておくとして活用できます。

石隈：内容項目ごと、1時間の授業ごと、ばらばらに評価はできません。共生社会に向かういろいろな立場や価値観、価値観の葛藤も考える多面的なもの見方・考え方も、クラスメイトなどそれぞれの意見の違いが出発点。外国との価値観の違いも出てくるし、行為を生む心も文化によって違い、人によっても違う。こう考えると「共生する心」という枠でくくれます。主体的というのは自

分、多面的というのは他人のことも見なくてはいけない。その中で、「人っていいな」というものにつながる。人のよさもいろいろなので単純に善悪ではありません。「文化」はある意味では狭い表現です。「自分以外の文化もある」と捉え他を否定してはいけない。それぞれの価値観で葛藤するけれど、ここがいいよねとお互いの文化を超えるものが出てくる。多文化の中で宗教の違いや戦争などの対立も、人を殺すということは許せないという、規範の中でも「社会規範」を超えた規範、つまり「根源的な規範」のようなものがこれから問われていくと思います。

加藤：その「社会的規範」のもとにあるのが人間的な部分ですね。

石隈：「根源的規範」です。人としての倫理ですね。その「根源的規範」がベースになり、それから「社会規範」があり、学級・学校など属している集団の「集団規範」があります。「みんなと仲よく」は「集団規範」ですね。日本社会での「社会規範」は「人の和を尊重しなくてはいけないよ」というようなもの。「根源的規範」は、様々な文化があり文化を超越した、例えば人を殺してはいけないという規範。三重の同心円を描くならば、中心に「集団規範」が位置付きます。その周りを囲うのが「社会規範」。「市民教育」とも関連しますが、きちんと働き税金を払いましょうというものが「社会規範」。それらを囲む、もっとも大きな円に「根源的規範」があるのではないかと、という表現を社会心理学ではしています。

加藤：「根源的規範」のところ人間性のよさがある。

石隈：そこにある気がしています。一面的にこれがよい悪いということに陥りやすい。幅広く見ようという視点がないと他の文化の価値観の想像もつかない。社会心理学でいう「規範」は、どのような行動がなされるか、なされるべきではないか、という集団で合意されている規準です。規範の中で最も小さいのは「集団規範」。もっと広い「社会規範」では集団の和を重んじるという価値と関わってくる。「社会的規範」の中の多様性を重んじるというものがベースにないと、押し付けになりま

す。多文化の共生として、他国の文化をリスペクトしなければいけないけど、さらに文化を超えた部分でこれは認められる・認められないというものがあよね、というのが「根源的規範」です。学級でやる場合は「集団規範」も無視できない。規範とどう付き合うか。規範については、社会心理学で三つキーワードがあり、一つは規範への服従。とにかく先生が言うから従う。その方がかわいがってもらえるし得をするから。もう一つは同一化。先生のようにになりたい、みんなのようにになりたい、というものです。同一化は表面的な理解です。そして、道徳ではここを目指していると思うのですが、内在化です。自分のものにしていく内在化のプロセスを、道徳の先生方は大事にされていると思います。

加藤：似た観点で私は他律・自律・自立という言葉を使います。他律があって自律。最終が自ら立つ「自立」。内在化が自らの価値観で立つという形でしょうか。「自律」することは、納得するところもあれば、「納得はしていないけれど聞き分けよくしよう」とするような表面的な解釈もあると考えています。

石隈：他律は服従に近いですね。同一化は、教育で役立つことがあります。先生方のフィードバックや関わりなど、モデルとして生き方を示すという部分で大事です。

加藤：ところで、「自我関与」をどう捉えればよいでしょうか。「読み物道徳」で、教材を読み登場人物の気持ちを考えさせ、共感的理解を図り、親切にした人の気持ちを考えれば、親切な気持ちが育つであろうという。そういうアプローチが主流です。しかし、それでは、読み取りをするだけで終わってしまうので、もっと「自我関与」させなければいけないと言われています。登場人物の気持ちをきいて、共感的理解をさせることだろうと。石隈：共感的理解は、私がその人だったらとその人の気持ちになろうとするところがありますよね。私だったらこうするよではなくて、「私がその人だったら……」というところが共感ですよ。自我関与は、自分のことのようにその状況が思えるというか。だから自分も揺さぶられるし、変わっていく。

加藤：「イチローが記録を出した際どんな気持ちだったろう」「がんばってよかった」では自我関与できないのではないかと思います。理想に行

けない自分をもう一人の自分が否定しはじめる。「がんばってよかった。これからはがんばりたい。」「ほくもイチローみたいにどんなことがあってもくじけずにやっていきたい」と、調子のよいことは言えますが、それは自我関与の結果の発言ではない。ところが、そのような感想を述べた子どもの結果から、子どもたちの共感的理解を図った、努力について学んだ、努力することを大切にすることが育った、としてしまいます。

石隈：ヒーローのストーリーを表面的に読み取るだけでは、共感的理解も自我関与もないのでしょうか。

加藤：道徳の評価は、授業の中で「思いやり・親切」をやって、それが身に付いたか付かないかというレベルでの評価ではないと思います。だからといって道徳教育として、学校外の実生活・家庭生活、社会生活、地域生活まで含めてしまうと評価としては大きくなり、それが道徳の評価でよいのだろうか、「総合所見」と同じじゃないか、道徳とは関係のない評価になってしまうのではないかと不安に感じます。

石隈：道徳教育が目指すものの限界は、実生活の行動へ影響を与えるのは道徳の授業だけではなく、学校全体の教育で考えないといけないという点。道徳と関係したところだけを取り出しにくい。全教員でやらなくてはけません。

加藤：「これが道徳の評価です」とモデルとして出しにくいという問題もあります。

石隈：「学習した内容をもとに〇〇に生かそうとしている」というのはいいですよ。「よりよく生きるために何かをしようとした」というのは、心理学の概念で言うとresilience（レジリエンス）です。日本語で言うと「弾性」や「回復力」という意味です。定義すると、非常に厳しい状況の中でも、健康な自分を維持したり、回復したりする特性。健康な自分を生かそうとする。「できた・できない」ではなく、「できようとする」ことです。打たれ強さともいえるし、回復力ともいえます。東日本大震災で被災した小中学生に行った、「震災後自分が工夫していることは何ですか。小さな一歩を教えてください」というアンケートをまとめていますが、回答は「少しでも節水しようと思う」「友達と上手にいくようにしようと思う」と本当に小さな一歩なんです。道徳の方向性に「小さな一歩」と

いう態度を取り入れるのは押し付けがましくなく、主体性と多様性という二つの軸で見るときに合致すると思います。

加藤：評価に関して、「大きくくり」とか「内容項目一つの価値に捉われずに年間の35時間通して」とある中で、いつどこで何をどのように評価するのか、そこを明確にしたいと思います。

石隈：「主体性」という自分として生きる部分と、「多面的・多角的」という他人と生きるというわけ方も一つのくり方です。

加藤：人間としてよりよく生きようとするとき、道徳の授業の中で子どもの学びがどうだったか、これは1時間の中でも評価できますし複数時間でも評価できます。もっと言えば、他教科・領域といった総合所見につながる部分でも「大きくくり」にできますが、あくまでも道徳の評価としては、何をしたかという「行動評価」ではなく、何をしようとしているかという「態度評価」としてプロセスを見ます。

石隈：子どもの成長プロセスには、教師のフィードバックという直接的対面的なものもあれば、賞賛的評価・appreciationのような評価もあります。これらは自己評価に影響を与えます。また、教師のもっている道徳性と評価方法の能力が問われるだろうという気もします。「教育評価」でいえば、道徳ノートや道徳ファイルいわゆるポートフォリオの中に何を詰め、どうやるか。毎回の授業と学期学年ごとの形成的評価、ポートフォリオ評価ですね。「教育評価」ではパフォーマンス評価もあります。発表や行動といったパフォーマンスを見て、こういう態度が育ってきたな、と。

加藤：これは一時間の授業内でもできますよね。

石隈：できますね。あとは学期ごとに児童生徒が見直してまとめる。

加藤：発達障害等のある児童に関しても示されています。発達障害に関する新たな項目を設け説明していく必要があります。指導上の配慮事項として、例えば視覚の障害。これは発達障害が無くてもどんな子でもわかりやすい、ユニバーサルデザイン（UD）ですよね。わかりやすく考えるために図式化するとか、言葉だけの整理ではなく色を分けるとか、いろいろな感覚や能力の中で子どもがより理解を深めるような手立てを考えようと。発達障害のある児童生徒への配慮へUDはつなが

るのではないのでしょうか。

石隈：つながると思います。また、支え・認め・称賛する評価は発達障害に関わらない。児童理解もそうだし、障害特性理解を入れて、指導と評価においてどういう点を留意するのかというところを表せたらよいですね。「自分なりの課題を見つけてみましょう」と、いくつか選択肢を示したところから始めるなどのステップが学習障害の子どもには必要かもしれない。ADHDの子どもは感情のコントロールが苦手なので、友達のよさに気づくのが遅かったり、気づいていても「悪さ」をしたりするかもしれない。そこは善悪で決めつけず、指導の工夫を示してよいでしょう。あとは評価の工夫も必要です。困る経験をたくさんしたり、いっぱい叱られたりしてきた子どもは、「人のよさ」がわかるのに時間がかかるかもしれません。しょっちゅう叱られている中で「人間ていいよね」と言われても「何がいいんだろう。自分はこんなに叱られているのに」となってしまいます。ここは押し付けずに見てあげたい。

加藤：そこも評価の工夫になってきますか。

石隈：評価の工夫と指導の工夫、ですね。発達障害の子どもには嫌な思いをした子どももいます。人のよさを理解する中で「人は様々だよね」という視点を入れ、人のよさ・善悪を押し付けないということが必要です。

加藤：発達障害の子どもだからこそ、「そういう考え方もいいよね」とか、そうやって認めることが大きくなりますね。

石隈：支え、認め、賞讃される機会が少ないことに留意しないとイケません。時間はかかるでしょうが、こういった子どもたちにこそ成長してほしい。だから、指導と評価の工夫は必要です。

加藤：構成的グループエンカウンターは特別支援の子どもが入ると、エクササイズプログラム自体がうまく立ち行かない場合もあると聞きますが。

石隈：構成的グループエンカウンターは、クラス30人いたら30人に共通するニーズを満たそうとします。挨拶できるようになろうとか、自己主張できるようになろうとか。ではそれをやったときに、AさんとBくんが発達障害で、その二人がこのプログラムに乗れるかなと考えます。これは乗れるけど、こちらは乗れない。乗れないプログラムを消すときに、共通のニーズの80%を満たすのであ

ればよしとし、50%になるとしんどいので、他のプログラムでマイナスの少ないものにして。ここを企画段階できちんとできるかどうかですね。加藤：道徳の授業でも、今日の内容項目は抽象的で難しい。参加させてもその子たちは発表もしにくいし、ポツンとなって嫌な思いをさせてしまう、なので道徳の授業を遠慮してもらおうと。それが本当にその子どもたちのためになっているのか。発達障害の子どもも道徳の時間に同じようにいるべきではないかと考えています。

石隈：100%になるところが80%になったとしても、逆に発達障害の子がいることで多面的・多角的な理解が広がれば、トータルでプラスになる。ただ、発達障害と言っても、知的レベルとか情緒的な安定度で個人差があります。あまりに不安定で授業についていけず、そこに入ることで傷つく危険性があるなら、むりに参加をすすめることはできませんが、なるべくいっしょがよいと思います。特に小グループでのディスカッションが難しい子は多い。その場合にはTTで特別支援の先生にも入っていただいていっしょにやる。

加藤：飛び込みで授業をしますが、そういう子はやはりいます。その子が授業で活躍したこともありますし、教室から出ざるをえなくなるというケースもありました。

石隈：発達障害の子どもに、どうするのがちょうどよいだろうか、とその子がいることで授業を工夫していきます。クラスに1割いるとして30人クラスで3人います。ここは大きいです。

石隈：学校全体の教育と家庭教育とか地域のことがないと、成長プロセスは進まない。道徳でできることのユニークさと限界。それから、「これは家の人に支えられてこういう成長しやすいんだろうな」「この子なかなか苦戦しているな」とか、授業だけでは解決できませんが、そういうのもある。家庭の貧困、虐待などいろいろあります。

加藤：道徳の限界と期待。その辺りをくわしくお聞きしたいのですが。

石隈：限界の一つは人間の成長。道徳での成長プロセスを見る際、道徳の授業と学校教育全体、家庭教育、地域教育もあり、発達障害など個別の要因もあるので、道徳の授業がその子の道徳性の成長プロセスに与えるすべてではありません。家庭・親や地域とどう共有できているか、という共同作

業も意識したい。子どもが見せる気持ちや行動は、信頼関係とか集団規範の中でたまたま見えるもので、それが全部ではない。うまくだまされるかもしれないし、見きれないかもしれません。子どもの個別の事情や関係性での限界があります。あとは授業でできることの限界。道徳では、先生も自分の生き方を揺さぶられますが、先生がそういう大変な作業をしてくれるとはかぎらない。魅力的だけど、大変だよねという教師の限界です。家庭も含め道徳授業を親に手伝ってもらってもいい。そして、子どもたちとの関係を先生がどう作っていくか。先生がよいモデルにもなります。教師の成熟、キャリア発達とか、道徳を教師全員やらなければいけない中で、道徳の観点を見直そうというチャンスになる。

加藤：「評価をしなければいけない」と追い込まれてしまうかもしれません。

石隈：先生も手ごたえを感じて、面白いと思ってもらうこと。今後の課題だと思います。社会的規範を超える部分が入れば、押し付けではなくなります。愛国心を押し付けるのではなく、「日本っていいよね」と自然に自分から思う。「和食はおいしい」といった単純な入口でいい。もっと根源的なものにして、その根源的なスタンダードへ進まない戦争は終わらない。社会的規範や国の事情はなかなか変わらないので難しいのですが、子どものころ、こういう学習で、共有化できる「みんなの願い」を考えておくと違うだろうと思います。道徳の評価は人格そのものを評価するのではなく、道徳についての学習のプロセスを評価するという事です。評価の目的は、評価を児童生徒にフィードバックし、自らモニターし実感して、意欲をもてるようにする。評価を付ける先生の方も意欲がわいてくる。それを授業の改善に生かす。障害のある人とも外国の人ともいっしょに暮らし、他の国と平和にやっていくためにはどうするか。21世紀型学力として、思考力や多面的な問題解決力、批判的思考力、実践力、持続可能な未来づくりなどがあります。これらが道徳では関連してくる。しかしそうすると道徳に関する基礎的な知識はどこなのか定義できると面白いですね。根源的規範とも関連させて、考えていきましょう。

道徳の教科化の趣旨を生かした

導入・展開・終末・発展の類に関する研究③

淑徳大学名誉教授 新宮 弘識



はじめに

道徳の授業に関する実践的研究は、道徳が教育課程に位置付けられた昭和33年から今日まで、57年間積み重ねられてきたのであるが、どのような成果を挙げることができたであろうか。

論語に「温故知新」という句があるが、過去の研究実績を明らかにすれば、新しい道徳の授業のあり方が見えてくるはずである。

道徳の副読本『ゆたかな心—新しい道徳』（光文書院）の「教師用指導書」に示されている展開例を、「どのような導入が行われているか」「どのような展開が行われているか」「どのような終末が行われているか」「どのような発展的活動が想定されているか」などの観点から分析して、その

類を明らかにしてみよう。

そうすれば、その成果や問題点が明らかになり、教科化される道徳の授業の改善に寄与できるはずである。

この研究は、1年32事例・2年34事例、低学年の合計66事例、3年35事例・4年35事例、中学年の合計70事例、5年35事例・6年35事例、高学年の合計70事例を分析して、その類を明らかにし、考察したものである。

具体的な事例は、わかりやすくするために修正加筆したものがある。また、具体的事例は、上段から低・中・高の順で記述しているが、具体例のない学年もある。

Ⅳ. 終末について(前号「Ⅱ.展開前段について」「Ⅲ.展開後段について」を受けて)

(1)終末の類と具体的な事例

終末の類	具体的な事例
a, 親や教師から話を聞いて励みを受け、実践意欲を高める活動	<ul style="list-style-type: none"> ・思いやりについて先生の話を読みましよう ・学んだ心や気持ちは、みなさんももっています。お母さんからの手紙に書いてありますから読んでみましょう ・学校を愛した人の話を、卒業生から聞きましよう
b, 学習を通してわかったことを、自分のものとしてまとめる活動	<ul style="list-style-type: none"> ・心に残った言葉を板書の中から選んでノートに書きましよう ・学習したことを、お父さんやお母さんに知らせるためにノートにまとめましよう ・学習したことをもとに標語をつくりましよう ・感謝について、学習前と学習後とを比べて、その違いをまとめましよう ・相手を大切にすることについて、参考にしたいと思う言葉を黒板に書かれている言葉の中から選んでノートに書きましよう
c, 学習内容を生かした今後の自分の生活を考える活動	<ul style="list-style-type: none"> ・よふかし大まおうに負けないための作戦を立て、実行ましよう ・今日学習したことをもとにして、今後はどのような心をもって生活していこうと思うかをノートに書き、実行ましよう ・自分らしさを伸ばすための実行計画を書き、実行ましよう

	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活目標を考え直ましよう ・今日学習したと同じことが書いてある本を見つけて読んだり、調べたり、家族で話し合ったり、実行したりして、その結果をノートに書きましよう
d, 学習内容を広げたり、深めたり、習熟を図ったりする活動	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にある「してはいけないことの一覧表」を見て、なぜいけないかを考えましよう ・学習した友達パワーを、たくさん集めましよう ・次の三つの話には、きまりのもとになる考えがどのように生かされているかを確かめましよう
e, 学習内容に類似した自分の経験を想起させて、自覚を促す活動	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶によって心が和らいだ経験を発表し合いましよう ・人を支える陰の力を発揮した経験を発表し合いましよう ・困っている人を助けた経験を思い出して、自分たちも思いやりの心をもっていることを確かめましよう
f, その他	

(2)終末に関する考察

1. 終末の教育的意義について

平成27年度に改訂された「学習指導要領解説道徳編」では、心の教育と行動の教育とによって道徳性を育成するという道徳の授業改善の趣旨が示された。また、同書に「終末は、(中略)道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の発展につなぐ段階である」と述べているが、これが終末の教育的意義である。

この調査によると、終末における活動は、教師による説話、学習内容のまとめ、学習内容を生かした今後の自分の生活の展望等がみられるが、終末の教育的意義から、これらの活動を具体的に考えてみよう。

2. 教師の説話について

調査結果の「a, 親や教師から話を聞いて励みを受け、実践意欲を高める活動」がこれに相当する。『ゆたかな心』での調査結果によれば、教師の説話を設定している指導案は比較的少ないが、一般的にこの活動を行う授業が多いように思われる。

この活動は、子どもたちが、教師の小学生時代の話やゲストティーチャーの話の聞いて、実践意欲を高めることを期待していると思われる。教師の幼い頃の話は、子どもたちの興味を引くだけでなく、人間的な影響を与えるという意味において、

その教育的意義は無視できない。

しかし、終末の教育的意義が、学習のまとめと今後の生活への課題を確立させることにあるとすれば、この活動だけでは不十分であると言わなければならない。

3. 学習を通して学んだことをまとめる活動について

調査結果の「b, 学習を通してわかったことを、自分のものとしてまとめる活動」がこれに相当する。この活動は調査結果でも多く活用されているし、一般的にも多いようである。

ここでは、「自分はこんなことを学んだ」という主体の実を結ばせることが中心であるが、それは、ねらいの方向を向いていることが望ましい。具体的には、ノートに「学習したことを短い言葉でまとめさせる」「板書の中から印象的な言葉を選ばせる」「自分の決意をまとめさせる」等の方法があるが、この活動をもっと強化してよいと思われる。

また、このノートを、評価の資料として活用することも考えられる。

4. 学習内容を今後の生活にどう生かすかという課題を考えさせる活動について

調査結果の「c, 学習内容を生かした今後の自分の生活を考える活動」がこれに相当する。調査では、この活動は比較的多く活用されているよう

であるが、一般的には少ないように思われる。「道徳の授業と他の教育活動とのセット化はよくない」とするタブーが、今なお存在しているのであろうか。

この活動は「終末は、道徳的価値をまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の発展につなぐ段階である」とする平成27年度の学習指導要領道徳一部改正の趣旨を生かす意味で大切である。このような終末の考え方は、私が40年来主張し続けてきた「道徳の授業は道徳教育の終わりではなく、始まりである」とする道徳教育論の具体化であり、終末は、「道徳の授業における学びと、その学びを自分の生活で拡充する接点である」といえよう。また、このような終末を行うには、調査結果の「b、学習を通してわかったことを自分のものとしてまとめる活動」をしっかりと行うことが重要になることはいうまでもない。

ところで、「学習を通してわかったことを自分

のものとしてまとめる活動」を受けて、「今後の自分の生活を展望する活動」を行うとすれば、終末に相当の時間が必要になる。そこで、道徳の授業を柔軟に考える必要が生まれる。例えば、導入や展開後段を思い切ってカットして、教材中心の授業を行い、「人間はすばらしいねえ」と余韻を残して終えたり、複数時間扱いの授業によって人間の生き方や自分の生き方を徹底的に考えたりする授業があってよい。食事にはフルコースがあり、軽食もある。和食もあれば洋食もある。このように、道徳の授業も柔軟に考える必要があろう。

5. その他の終末の活動について

調査結果の「d、学習内容を広げたり、深めたり、習熟を図ったりする活動」「e、学習内容に類似した自分の経験を想起させて、自覚を促す活動」についてであるが、これは、授業の内容によって必要な場合もあり、展開前段で行うことが効果的な場合もある。柔軟に考える必要があろう。

V. 発展について

(1) 発展の類と具体的な事例

発展の類	具体的な事例
a, 学習内容に類似した話を読んだり調べたりしてその結果を記録したり、紙芝居をつくったり、背面黒板に発表したりする活動	<ul style="list-style-type: none"> ・「人が喜ばば自分もうれしい」ことが書いてある国語の教科書や読み物を読んで紙芝居をつくり発表する ・校歌には、どのような願いや希望がこめられているかについて調べて発表する ・ボランティア活動をしている人々の行いや考えを、テレビやインターネットで調べて発表する
b, 学習内容を家族や周りの人に話して、その人達の意見を聞く活動	<ul style="list-style-type: none"> ・がんばろうと思ったことを、お父さんやお母さんに話して意見を聞く ・自分がつくった標語を家の人に見てもらい、意見を聞く ・仕事のやりがいについてお父さんに聞く ・家族で環境問題を話し合う ・わが家の礼儀について家族で話し合う
c, 学習した内容を実行して、その様子や結果を日記やカードに書いたり、背面黒板に発表したりする活動	<ul style="list-style-type: none"> ・時間を大切に生活をして、その結果を発表する ・整理整頓を実行し、その結果をまとめて発表する ・家で実際に働き、働くときどのような喜びがあるかを日記に書いて発表する ・自分にできる思いやりを実行して記録する ・学校の委員会活動を行って、その結果をまとめる
d, 学習した内容を実行している人や友達をさがして、記録したり発表したりする	<ul style="list-style-type: none"> ・正直な人をさがして記録し、発表する ・私たちの世話をしてくれている人々に会って、どんな気持ちで世話をしてくれているかを聞き、その結果を発表する

活動	<ul style="list-style-type: none"> ・人々の助け合いを、インターネットや新聞で調べて記録する
e, 朝の会や帰りの会で、学習内容をどのように生活に生かすか話し合う活動	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで使うものの使い方を学級活動で話し合う ・学級活動で、なまけ忍者追い出し作戦を立てる ・係活動に進んで参加しているかについて、帰りの会で発表し合う ・学校のきまりを低学年に伝える委員会活動をする
f, その他	

(2) 発展に関する考察

1. 発展の具体的活動について

「学習内容に類似した話を読んだり調べたりする」「学習内容に類似したことを実行している人や友達をさがす」という調べ活動、「学習内容を家族や周りの人に話してその人たちの意見を聞く」という聞く活動、「学習した内容を生活の中で実行する」という実践的な活動等が、これに相当する。発展の具体的活動である。

さらに、これらの活動を行った後、その結果を発表したり、活動の中で生まれた問題を道徳の授業で話し合ったりするという活動も考えられるわけである。調べ活動、聞く活動、実行等のさせっ放しではなく、その結果を確認し合うという活動の設定が、この学習の特長の一つである。

2. 発展の教育的意義について

調べる活動や他者の意見を聞く活動は、道徳の授業で学習し内容が拡充（拡大という量の広がり）と充実という質の深まり）されたり、新しい疑問が生まれたりして、次の道徳の学習に発展していくという教育的効果が考えられる。また、学習内容が自分のものとして胸に落ちるといった教育的効果も考えられる。

実行するという活動は、道徳の授業でわかったことを実践するという教育的意義だけでなく、授業で学んだことが実行を通してよくわかり、体得されていくという教育的効果がある。さらに、調べる、聞く、実行するという発展的活動のさせっ放しではなく、発表や話し合いや再度の授業によって確認するという活動を設定していることは、友達の経験を改めて認識し、それが刺激となって学び合いが始まるという教育的意義がある。

また、道徳の授業での学習内容をもとに、それ

を学校生活の中でどう生かすかという活動としての学級会や朝の会、帰りの会等の発展的活動も重要である。これらの発展的活動は、「道徳の授業は、道徳教育の終わりではなく、道徳教育の始まりである」とする考えに立っており、人格の完成に向かう道徳教育の具体化であるということができよう。

この意味において、道徳の時間の終末は、道徳の授業と生活とを結ぶ、発展へ向かう重要な接点であるといつてよからう。

3. 発展のさらなる強化について

わが国の道徳教育には「道徳の授業と子どもの生活とのセット化は望ましくない」とする道徳教育のタブーがあった。一時、「道徳教育は生活の中で行うべきである」とする教育論があり、道徳の時間を何とかして確保したいとする行政的立場からこのタブーが生まれたのであろうが、それが道徳授業の硬直化、形式化を生んだように思われる。今や、行政的道徳教育論から、本来の教育的道徳教育論に立ち返らなければならない時期である。

本来の教育的道徳教育論とは、昭和33年当初からあった、道徳教育の補充・深化・統合という教育論であり、道徳教育は、道徳の時間を要として学校における他の道徳教育との関連や、家庭・地域社会における道徳教育との連携を行う必要があるとする道徳教育論である。また、道徳の教科化にあたり、「特別の教科道徳」のように「特別」という名称を付した教育的意図である。このような本来の道徳教育論の「もと」は、「内外相応じてもものは成る」とする哲理であろう。

道徳的価値をまとめ、発展につなぐ、終末の工夫と発展の在り方

神奈川県二宮町立一色小学校 星崎 啓介



1. はじめに

平成30年度より「特別の教科 道徳」が実施される。学習指導要領には、道徳科の特質を生かした計画的・発展的な指導について、以下のように示されている。

道徳科が学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要としての役割を果たすことができるよう、計画的・発展的な指導を行うこと。
 (一部改正 小学校学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳 第3)

また、学習指導要領解説には、「終末は、ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の発展につなぐ段階であると言われる。」という記述もある。

この記述の前段では授業で学んだ道徳的価値を「まとめる」ことの必要性が、後段では今後の発展へと「つなぐ」段階であることが示されている。「つなぐ」ということは、「つなぐ元」と「つなぐ先」が存在する。「つなぐ元」は授業で学んだ道徳的価値であり、「つなぐ先」は道徳教育であろう。その間にあるのが、道徳授業の「終末」である。このことから、道徳教育の要としての道徳科がその役割を果たすためには、終末の工夫が必要であると言える。また、つなぐ先である道徳教育の中で、発展的活動を考えていく必要もあるだろう。

2. 終末の学習活動の工夫～「いのちのまつり」
 (『ゆたかな心 3年』光文書院)の実践から～

(1)道徳ノートへ記入する「書く活動」

私は道徳の授業で、道徳ノートを活用している。1冊のノートだけを使用することもあるが、本実践では定型のワークシートを毎時間書き、それを「道徳ノート」として積み重ねていく方法をとった。

授業の終末に道徳ノートを活用することで、子どもたちは授業で学んだ道徳的価値をまとめていた。また、自分の言葉でまとめる中で、じっくりと自分と向き合う時間が確保され、授業後の積極

的な姿や心の在り方につながり、生きた言葉となって子どもたちの心の中にとどまっていた。さらに、ノートの記述のふりかえりにより、道徳的価値の自覚を再び促すこともできた。

しかし、何の観点ももたせずに書かせるのでは、子どもたちが授業で何を学んだかが見取りづらい。そのため、道徳の授業のねらいである「道徳的判断力」「道徳的心情」「道徳の実践意欲と態度」の3つの観点をもたせ、書かせている。子どもたちの言葉では、低学年ならば「分かったこと」「いいなと思ったこと」「やってみたいこと」、高学年ならば「理解したこと」「感動したこと」「実践してみたいこと」となる。

以下が、子どもたちの道徳ノートでのふりかえりである。

<道徳的判断力に関わる記述>
 ・私は、宇宙の始まりの後から命が繋がっていることが、とてもよく分かりました。
 ・自分の命は、ご先祖様の命をもらっていることが分かりました。みんなが命を大切にしてくれたから自分が今ここにいるということが分かりました。

<道徳的心情に関わる記述>
 ・私は、生まれてきて本当によかったです。
 ・今まで生きてきて本当によかったんだな、と思いました。

<道徳の実践意欲と態度に関わる記述>
 ・お父さん、お母さんから命をもらって私たちは生きているから、この命を大切にしたいし、みんなで大切にしていきたいなと思います。
 ・過去の人のためにも、未来の人のためにもちゃんと生きなくてはと思いました。

(2)発展へのきっかけを作る「問題意識をもつ活動」

終末において、教師から子どもにもう一度問いを投げかけることで、子どもの中にさらなる問題意識が生まれ、発展的活動へとつなぐことができると考えた。本実践では「自分の命について、もっと考えたいことはないですか」と問いを投げかけて授業を終え、問いに対する考えをノートに書かせた。このように、道徳ノートは日常的道徳教育で行う発展的活動を支える手立ての一つにもなる。

3. 発展的活動の在り方

授業の終末に問題意識をもてば、子どもたちは自ら進んで問いに対する考えを深めていく。

(1)子どもたちに見られた活動と姿

[調べ活動]

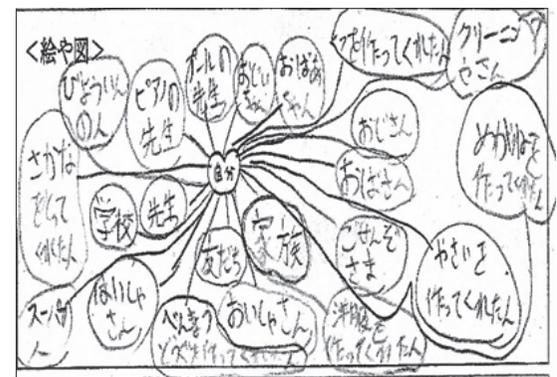
- ・国語辞典を使い「命」という言葉を調べ、命の概念について広げた。(書籍を活用する)
- ・ニュースやドキュメント番組を見て、「一生懸命生きなければいけない」と決意を新たにした。(テレビを活用する)

[聞く活動]

- ・お母さんに、曾祖父が子どものころに戦争があった話を詳しく聞き、自分の命のありがたさを実感した。(家族に聞く)
- ・お母さんと命について話し合い、命について新たな視点をもった。(家族と話し合う)

[再び考える活動]

- ・自分の不注意でけがをした体験を想起し、命を大切にしなければいけない、とふりかえった。(体験と学びを結び付ける)
- ・自分で命のつながりをじっくり考え、過去・現在・未来という時間軸での命のつながりだけでなく、今の自分の命とつながり、支えてくれている命の存在に気づき、命の価値を広げた。(新たな価値に気づく)



▲命の価値を広げた子どもの道徳ノートの記述

(2)発展的活動のサイクル化

発展的活動は、「させっぱなし」では子どもたちの学びの幅を狭めてしまう。日々の学級経営、道徳の授業構想の中でしっかりと計画し、日常化させることによって、道徳的価値を学び続ける学びのサイクルを創出するため、次のような実践を行った。

①水曜日に道徳の授業を行う。この道徳の授業の後から1週間を発展的活動の期間とする。

②水曜日に道徳ノートの記述分析、木曜日に学級通信を作成。通信に「道徳の取り組み」コーナーを設け、授業の様子・ふりかえり・家庭での取り組み内容の例示とお願いなどを毎週掲載。

③金曜日の朝の時間に、先週の道徳の授業後行った発展的活動を発表させる。班で話し合う・全体で発表する・道徳ノートを交換して読み合うなど形式は様々だが、友達の考えで「いいな」と思ったことは青鉛筆でノートに加筆させる。

このようにサイクルを組むことで、子どもたちは活動の見通しをもつことができ、無理のない形での発展的活動へとつながった。また、当初はなかなか主体的な取り組みは見られなかったが、サイクル化し、日常化し、新たな学びを見つけてくる子が増えるにつれて、学級文化としての広がりを見せた。今では多くの子どもたちが、発展的活動に取り組むようになった。

(3)総合単元化しての取り組み

前述の発展的活動で子どもたちの道徳的価値の学びは拡充されると考えるが、どの学習も机の上、頭の中での学習である。それをもっと実感を伴った学習へと発展させるには、実行することが必要である。そこで、総合的な学習の時間で取り組んだ蚕の飼育と総合単元化させた実践を行った。

子どもたちが一生懸命世話をしてきた蚕の命を、繭をとるために終わらせなければならない瞬間が最後に訪れる。蚕の命に思いをよせながら活動に臨むことで、命への実感を伴った学びとなった。蚕のお墓をつくって手を合わせる子どもたちの姿には、私も心を動かされた。

4. 終わりに

発展的活動に取り組むことで、子どもたちは道徳的価値を拡充していくことが分かってきた。しかし、教師の指導なくして子どもたちのそのような姿や学びは望めない。道徳の授業を一時間の完結したものとして捉えるのではなく、「道徳の授業は道徳教育の始まりである」と捉えるとともに、道徳教育でどのような子どもを育てていくのかを教師が教育観の「もと」としてもつことで、様々な終末・発展の形を考えていけるのではないだろうか。

今後の発展につなぐ終末の工夫



千葉県長南町立豊栄小学校 関 弘子

1. はじめに

昨今、ゲームアプリの利用が国際的な話題となっており、急速に進展する情報化社会に対応していく資質、能力の育成が急務である。児童が主体的な判断の下に行動できることを目標とする道徳教育の重要性が高まっている。

その要となる道徳科における学習は、道徳的価値の理解を基に、自己の生き方について考えを深めることが大切である。他者の多様な感じ方や考え方に触れる中で「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」といった人間性を育てていく役割を担う。ねらいを明確にした質の高い指導方法が今後の課題となり、実社会へとつなぐ終末の在り方が問われる。

展開後段では、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めることができるようにし、終末へと思考の流れをつないでいきたい。

2. 地域社会との連携

地域の方々の学校教育への期待を大切にしながら、学校が核となって、家庭、地域をつなぐ役割を果たしていくことが大切である。望ましいと思う行動を身につけるためには地域社会の見守りが欠かせない。地域の公共施設等に取材し、協力を得た授業を行うなど、授業の在り方を工夫することにより、子どもたちに社会の一員としての意識が育まれると考える。

第1学年の実践

- 主題名 きまりをまもろう
- 教材名 「みんなでまもろう」
(『ゆたかな心 1年』 光文書院)
- ねらい 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にしようとする意識を育てる。

展開後段で、きまりはなぜあるかを話し合った。終末では、地域の福祉センターの方に取材した映像を流し、利用者がきまりを守ったとき、また守らなかったときの思いについて語ってもらった。子どもたちは放課後に利用している福祉センターの方の語る言葉を真剣に聞いていた。



第4学年で公共の場での約束や社会のきまりの大切さを考える授業を実践したときには、茂原市の駐輪場の状況を紹介します。終末で、市の駐輪場の管理をしている方の話を紹介し、小学生の時期に放置自転車について考える機会をもつことで、将来の実践へとつながることを期待した。

授業のねらいに応じて、終末で地域の方々に子どもたちへ語りかけていただき、心に響く授業となるように実践している。事前に打ち合わせをしてビデオに録画し、映像として視聴するとき、授業に参加していただくときがある。新宮弘識先生が『子どもの道徳113号』(光文書院, 2016)で展開後段の事例として「学習した道徳的価値は、自分の身近な人ももっていることを認識させる活動」を紹介している。身近な地域の方々のメッセージは、子どもたちに訴えかけ、余韻を残す効果が高い。

3. 自己を見つめ直す活動

本時で学習したことを、今後どのように生かしていくかを他教科や学級活動と関連させながら考

える活動を紹介する。

第1学年の実践

- 主題名 きもちよいいえのせいのかつ
- 教材名 「ちゃんとのたつじん②」
(『ゆたかな心 1年』 光文書院)
- ねらい 家の中で自分でちゃんとできることを見つけて、毎日をもっと気持ちよく過ごそうとする意欲をもつ。

本教材は、起床から就寝まで主な場面で左右の絵の違いを話し合いながら、「ちゃんとのたつじん」は、自分でできることと毎日続けてできることに気づかせる内容であり、視聴覚機器で様々な場面を提示しながら児童の関心を高めていった。

終末では、生活科で継続しているお手伝いカードを視聴覚機器で映し、保護者からのメッセージを紹介した。保護者の励ましが子どもたちの実践への意欲を高めたと考える。授業後は家で自分のできる仕事を見つけ、継続する活動に取り組んだ。家庭と連携を図り、日常生活に生かされるように配慮した。

おてつだい	月	火	水	木	金	土	日	おうちのかたから
ふとんとき	×	○	○	○	×	△	×	おむすびを みとりでいてく たすります。
くつはら	○	○	○	○	○	○	○	おやのあうら いも できいま す。
あいまなげ	○	○	○	×	○	×	○	おはし まちが すて ばら かま す。

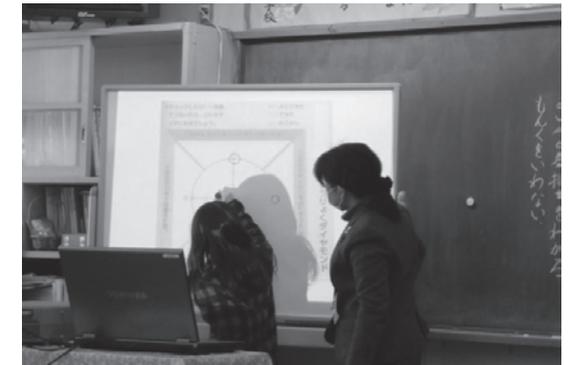
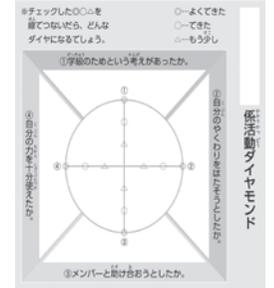
第3学年の実践

- 主題名 きょうりょくの大切さ
- 教材名 「しごとチェンジ」
(『ゆたかな心 3年』 光文書院)
- ねらい 係活動がうまくできない原因を考え、みんなで協力することの大切さに気づく。

本時を通して、なぜ係の仕事を交換することになったのか、また、交換したことによってどんなことに気づいたかを考えることで、学級のために、お互いに助け合って仕事をしていくことの大切さに気づかせていった。終末では、「係活動ダイヤ

モンド」(右下図)を紹介し、これまで係活動や当番活動で、どんな取り組みをしてきたかを振り返るようにした。

書き終えた後、グループになって係活動の様子について聴き合うようにし、皆の前で発表する場も設けた。ここでは、今までの係活動を客観的に見直すためのシートを活用し、自分たちの係活動の実態を振り返らせ、これからの係活動を充実したものにするための方向性を見つけさせた。



4. 終わりに

家庭、地域との連携を図った終末の工夫や、自己を見つめ直す活動により、子どもたちはねらいの根底にある道徳的価値をより身近に考えられるようになることが期待される。

今後、学習状況の評価の在り方を課題として、学んだことを振り返る自己評価、相互評価の位置づけについて検討していきたい。

- | | | | | |
|--------------------------------|---|---|---|---|
| ① 出てくる人のしたことについて、考えることができましたか。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ② 友だちの考えを、よく聞くことができましたか。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ③ 自分のことについて、ふりかえりましたか。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ④ この時間に考えたことを、これからやってみてほしいですか。 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 考えたこと | 4 | 3 | 2 | 1 |

児童の心にしみた、國中教授からのメッセージ

—5年「帰ってきた、はやぶさ」の実践を通して—

神奈川県相模原市立淵野辺東小学校 風間 嘉裕



1. 資料「帰ってきた、はやぶさ」

（『ゆたかな心 5年』光文書院）について

小惑星探査機「はやぶさ」に搭載された「マイクロ波放電式イオンエンジン」は、國中均教授とそのグループが長年研究を行い、世界で初めて実用化に成功したものである。20年の歳月をかけて完成したのだが、開発開始当初は世界中の多くの技術者から非難され、何度も失敗をくり返してきた。そのような完成までの過程から、「未来を自分の手で創りたい」という國中教授の強い思いを感じ、新しいことを工夫して成し遂げていくために大切なことを考えることができる資料である。

2. 授業のねらい

内容項目1-(5) 真理・進取・工夫に照らして、「自分で未来を創った國中教授から学ぼう」というテーマをもとに、「自分たちの未来を自分たちで創るために大切なことを考え、自分たちで未来を創っていきたいという気持ちを高める」というねらいを設定した。

3. 「デジタル道徳」を活用した授業の実際

(1) 動画について

「デジタル道徳」には、國中教授のインタビューが収められている。資料の内容についての話に加えて、國中教授がこれからの未来を担う子どもたちに向けた思いを語る部分もあり、印象的である。

(2) 活用のタイミング

動画内の國中教授の言葉には、子どもたちに「未来を創ってほしい」「自分たちで新しいことをめざしてほしい」という思いが強く込められている。

子どもたちがその思いを知り、自分たちのこととしてその思いを受け取り、考えるには動画を視聴するまでの学びが大切になる。

そこで、学習の流れを以下のように計画し、動画を終末で活用することにした。

①導入……「未来は誰が創るのか」と問いかけ、自分ごととしてとらえさせる。次に、「未来を創るために大切なこと」を考えさせることで、これまでの経験を想起させる。

②展開……「國中教授から学ぼう」と投げかけ、資料を読んで、國中教授が進めてきた研究の苦労や努力を知り、それを乗り越えて研究を続けた心の「もと」と、それを支えた様々な価値について考えさせる。また、國中教授の見ているところに気づかせる。

③終末……國中教授のすごさを感じた上で、「デジタル道徳」で國中教授のインタビュー動画を視聴する。実際の國中教授の言葉から、学習したことをもとに、改めて自分ごととして考えさせる。

(3) 授業の実際

右頁の表を参照。



▲実際の板書

教師の発問 (◎) と児童の反応 (・)	「デジ徳」の活用
◎未来は誰が創るの？ 創るためのポイントはなに？ ・自分たちが創る。・努力 ・挑戦 ・思うところに進む。・あきらめない ・協力	・國中教授の写真を提示。
◎國中教授から学ぶことはなに？ ・國中教授は未来の研究に役立たせたいという気持ちがある。 ・自分で新しい未来を創りたいという強い気持ちがある。 ・その気持ちがあるから、20年も努力を続けることができた。 ・何度も失敗し、それを調べ、考え、また実験して失敗してをくり返して。それが失敗を土台にするということだ。失敗は成功のもと。 ・はやぶさが持って帰ってきた物質は、世界の人々と協力して調べようとしているし、努力しているときも仲間と協力している。 ・自分ならアメリカ式で打ち上げたり、改良したりする。その方が早くできて、20年もかからない。	
◎國中教授はどこを見ていたんだろう？ ・未来を見ていた。 ・みんなの輝く未来を見てたんだ。 ・打ち上げや成功だけを見ていたんじゃない、もっと先を見てたんだ。 ・だから、新しいエンジンで打ち上げたかったんだね。	・はやぶさの写真を提示。 ・國中教授のインタビュー動画を視聴。
◎國中教授からのメッセージです。 ・國中教授はすごい。尊敬する。 ・新しいことにチャレンジすることは大切だと思う。 ・自分も一つ目標をもって、それをつきつめていきたい。	

(4) 動画を見ての児童の感想

國中教授はメッセージで「スペシャリストになってください」と言っていました。私は将来、動物に関わる仕事につきたいと思っているので、動物のまだ知られていない生態やくわしい情報や細かい知識などを知って、國中教授のようになりたいです。そのためには、國中教授のように長い時間が必要だと思います。どんなに時間がかかってもあきらめないで、大きな未来を切りひらきたいです。そして仲間と協力して、どんなことがあっても一つのことに向かって進み、いつかは國中教授のように自分の未来を創り、自分だけでなく人の未来に少しでも手助けができるような人になって、輝く未来を私自身が切りひらけたらいいと思います。

4. 「デジタル道徳」を使った授業の成果

読み物資料は、児童の実生活に近い題材もあれば、今回のように実生活とはほど遠いと思われるものもある。そのような実生活とは遠い資料でも、自分ごととしてとらえ、自分の生活に生かそうと考えていくことが大切である。しかし、中には自分ごととして考えたり、自分の生活に生かしたりするのが難しい児童もいる。

そこで、動画を使い、学習してきた資料の本人が自分たちに話しかけてくれて、その人が画面の向こうにいると思えると、自分と遠かった人が近くに感じられるものである。

子どもたちの「よくありたい」という心に、学習の中で考えたことと、すばらしい生き方をしている人の言葉がしみた瞬間だった。



子どもの柔軟な発想に脱帽！

～「節度・節制」をいかに授業するか～

使用教材 「かぼちゃのつる」(光文書院 1年)



筑波大学附属小学校 加藤 宣行

1. 教材について

本教材は、低学年でおなじみ「節度・節制」の学習をねらいとした教材である。ストーリーは、好き勝手をして「自分の分」を守らないかぼちゃが、結果的にひどい目に遭うというものである。いわゆる、「因果応報、それみたことか」教材である。

そこから学ぶことは何か。普通に考えたら、「かぼちゃの失敗を生かして、自分はそうならないように気をつけよう」というような、教訓的な性質の論調になってしまうのではなかろうか。

2. 発問の工夫

この教材を反面教師として扱うのではなく、よさを見つけ出す観点で読む(子どもに読ませる)ことはできないだろうか。それが私の問題意識であった。そこで、まずはかぼちゃのよいところを探してみた。どうしても自分勝手な悪いところばかりに注目されてしまうかぼちゃであるが、一つ見つかった。

それは、自らを解放しているところである。自由に生きているとも言える。私たちは、なかなか自由奔放に生きることはできない。もちろん、他人の犠牲の上に成り立つ自由はもつてのほかであるが、そうでなくても無意識のうちに自分自身を型にはめてしまうことはないだろうか。その点、かぼちゃは、自由に生きる方向性こそ間違っているが、その「自分らしく生きる」気構えは捨てがたい。

そこで、そのあたりをテーマにして発問を構成することにした。つまり、「のびのび生きることはよいことであるはずだが、それがよいことになるときとならないときがある。その違いは何か」ということである。

そうしたら、なんとなんと、子どもたちは私の予想を超えて、かぼちゃの新たなよさを見つけ出したのである。

3. 実際の授業

□教師側から投げかけたテーマ(問題)

のびのびすることって、よいことですか。

- ・いいこともあればよくないこともある。
- 「では、このお話の中ののびのびはよいことかどうか考えながら読みましょう。」
- ・かぼちゃはまわりのことを考えないでのびのびしすぎている。
- ・すいかは人のことを考えながらのびのびしている。

かぼちゃとすいかの違いは何でしょう。

- ・すいかはよいがまんをしている。
- ・かぼちゃはがまんしていない。

すいかのようなのびのびをすることが、よいことなのですね。

- ・でも、かぼちゃの方がいいかもしれない。
- 「えっ!? どういうことですか。」
- (この反応は私の予想に反するものだったので、少し戸惑った。)
- ・だってすいかが「おこられるからがまん」だったらあまりよくないよ。
- ・だったら、かぼちゃが反省してよくなるうとしたら、その方がいい。
- (ここまで聞いて、やっと子どもたちの言っている

ことが理解できたと同時に、「すごいな」とうなってしまう。)

「なるほど、確かに『おこられるからがまんしよう』と思って、自分の畑の中でじっとしているすいかだったら、反省して次からがんばろうと一生懸命直そうとするかぼちゃの方がいいね。」
 ・うん、私もそういうときがあるから……。
 (子どもはなんて自由奔放に思考できるのだろうか。まいました!)



「そのようなよいがまんをすることができる、どんなよいことがあるかな。」

- ・人のためだけではなく、自分のためにもなる。
- ・反省ができることはよいこと。その反省の仕方が大事。よくない反省だったら、またいけないことをくり返してしまうけれど、よい反省をすると、どんどんよくなる。

4. 考察

発問を変え、一度子どもたちの思考をフラットにさせてから、よい世界を探させると、子どもたちは規定の概念を容易に乗り越えて、それこそ自由に発想し、「もしこうだったら」と教材に描かれている世界を広げ始めるのである。

そのような発想ができるようにするために、教師が授業中に行うべきポイントは次の二つである。

- ① 本(もと)の心から考えさせる。
- ② 板書で図式化して子どもの思考をサポートする。



①は、行為・行動だけでは、その善し悪しはわからないということである。のびのびにしても、がまんにしても、それだけではよいとも悪いとも言えない。本(もと)の心があってこそ、よいのびのびにもなるし、よいがまんにもなる。人目を気にしたびくびくのがまんでは、他律的な価値観から抜け出すことができない。

②は、本(もと)の心と行為をつなぐ構造的な理解を板書で見せてやることで、子どもたちは「ああ、そういうことか」というように、思考を促進させ、さらに新たな気づきを得ることができるようになるということである。その意味で、板書は授業の記録板というよりも、子どもたちの思考を広げるためのフィールドとすべきである。

5. まとめ

授業後、次のようなまとめを道徳ノートに書いてきた子どもがいた。

今日は、のびのび生きるというのはどういうことかについて考えました。さいしょ、私はただ自分の生活の中でよいことをすすめていくだけだとおもっていましたが、でも、どうとくのじゅぎょうをして、自分の好きなように、のびのび生きるのもいいけれど、人のことも考えて、もし、わるいことをしてしまったら、はんせいをします。そして、はんせいのしかたを考えるとということがわかりました。これからも、「のびのび」を考えて、よりよいまい日にしていきたいです。

よりよい毎日のために、何をよりどころに自らの行為・行動を決めるかが大事であるということをも自分なりの言葉でまとめている。このような、本時の学びを自分の言葉で言語化することも、道徳を教科として行うためのポイントだと考える。そして、自分なりに納得し、「いいなあ」と思ったことは、子どもたちは自主的に行おうとする。これこそが、道徳的判断力を伴う、道徳の実践力であろう。